

## 編集後記

今回の「第35回天文学に関する技術シンポジウム」は、「第5回可視赤外線観測装置技術ワークショップ」と合同開催を企画し、平成27年12月7日から11日の5日間で東北大学理学研究科青葉サイエンスホールにて開催いたしました。前半二日間はワークショップとし、後半二日間を技術シンポジウムとして行い、間の一日を「次世代望遠鏡セッション」とし、次世代に繋がる幅広い観測装置・技術の紹介を招待講演として合同で行いました。この合同セッションは非常に評判が良く、ワークショップ・技術シンポジウム、双方の参加者は勿論、東北大学の学生や研究者の方も聴講されていました。また、聴講できない方からは、ネットでの中継や録画配信を希望する方もいました。ただし、合同セッションと言いながらも天文学研究者の講演が多く、技術者からの講演は1件のみだった事を残念がる意見も聞かれました。技術者が新しい装置・技術に関わっていない訳ではないと思いますが、新しい装置開発全体を紹介するとなると、まだ技術者がそこまで把握しているとは思われていない、或いは頼られていないと言えるのかも知れません。国立天文台ではプロジェクト制に移行してから、プロジェクトマネジメントが重要視されており、それは研究者・技術者に関係なく求められています。個別の技術を極めることも重要ですが、全体を見ることが出来る技術者も育て、次回このようなセッションの際は多くの技術者が招待講演されることを期待します。

合同だったこともあり参加者数は多く、シンポジウムでの口頭発表18件、ポスター発表17件、ワークショップでの口頭発表23件、ポスター発表17件、合同招待講演8件、聴講のみも合わせると5日間で83名もの参加者がありました。合同セッション後に行ったシンポジウム・ワークショップ交流会にも38名もの参加者がありました。発表会場で交流会を行ったのでポスターを見ながら質疑応答の続きをしたり、お互い分野の違う観測装置について質問があったり、研究者・技術者の違いからの見方の違いなど話し合ったり、いつも以上に幅広い交流が行われていました。

エクスカーションは24名の参加で最終日11日の午後に行いました。地球物理専攻実験室では坂野井准教授に飛行体搭載用観測装置の試験のための冷却チャンバーを説明いただきました。天文学専攻実験室のまだ新しいドーム内を津村助教に案内いただきました。場所をマイクロ・ナノマシニング研究教育センターに移し、金森准教授と佐々木准教授にナノマシーン製作現場を案内いただきました。分野は違えど光を扱っていることから、見覚えのある測定装置や機材があり、少し意外に感じました。

他の研究会がそうであるように、35年前に第1回を開催してから参加者が中心となって本シンポジウムを企画・運営してきました。この間、国立天文台技術系職員の組織化に伴い主催が技術系職員の組織とし、旅費などの予算を確保し、継続的に開催できるようになりました。この技術系職員組織をさらに発展させるために国立天文台技術推進室が発足し、人事管理・事務作業は技術推進室に移行しました。今年度より、本シンポジウムも技術推進室の主導で行われることになり、主催が国立天文台となりました。実際の企画・運営するのは世話人会ですので、技術系職員が中心であることに変わりはありません。今まで遠慮して言えなかったことを、通るかどうかは別として堂々と国立天文台に要求できることになりました。今後、益々観測技術を発展させるため、交流を深められるような会に発展することを期待します。

最後になりますが、本シンポジウム及びワークショップ開催にあたり東北大学の関係者のみなさまには大変ご尽力・ご支援いただきました。特に秋山研究室院生の鈴木元気氏は、当日の会場準備などで細かなところまでご配慮いただき大変お世話になりました。この紙面をお借りして感謝申し上げます。

天文学に関する技術シンポジウム世話人会  
篠田一也、高橋敏一、長山省吾、（以上、国立天文台）  
秋山正幸（東北大学）